

平成 30 年 6 月 18 日現在

機関番号：24303

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26463527

研究課題名(和文) 発達障害児をもつ母親の養育行動形成プロセスと要因の探索

研究課題名(英文) A study of processes and factors affecting parenting style for mothers of children with developmental disorders

研究代表者

志澤 美保 (Shizawa, Miho)

京都府立医科大学・医学部・准教授

研究者番号：00432279

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、発達障害の子どもをもつ母親の養育スタイルや日常生活がどのように変化していくのか、そのプロセスと影響要因を明らかにすることを目的とした。

相互交渉場面での発話分析や質問紙による食物嗜好の分析から、発達障害児をもつ母親の特徴的ななかかわりや、自閉症的傾向が高い児は食行動の問題を多く抱えていることが明らかとなった。また、発達障害児の母親に対する半構造化面接では、育児上で困難点や、今後の集団生活での心配事について聞き取り、質的帰納的に分析したところ、母親の子どもの特性に気づいた時点から現在の育児にいたるまでのプロセスが得られた。これらの結果から今後の支援に必要な視点が得られた。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study was to determine what factors may influence processes related to changes over time in parenting style for mothers of children with developmental disorders. The study consisted of two analyses. An inductive analysis of qualitative data identified environmental factors relating to mothers' behaviors, and an objective observation of the mothers' behavior in actual interactions with their children. Suggestions for what future support for these mothers should entail was discussed.

Semi-structured interviews were performed on a sample of mothers of children with developmental disorders. Results of the qualitative analysis of the interviews described the parenting change process from the time the mothers became aware of their child's disability to the present. Based on these analyses, viewpoints were offered on future support that should be provided for mothers of children with developmental disorders.

研究分野：地域看護学 母子保健

キーワード：発達障害児 母親 養育環境 養育行動

## 1. 研究開始当初の背景

発達過程にある子どもにとって養育環境、特に家族や夫婦関係、親のストレスを含む家族要因や、貧困などの親の社会的・経済的要因などが、子どもの成長発達に影響することが知られている（例えば Lyouns-Ruth and Zeanah, 1993）。また近年、これらの養育環境も、少子化、女性の就労率の増加や経済格差など、大きく変化し多様化してきている。子どもの発達の最も重要な要因のひとつである母親のかかわりについては、定型発達児や発達障害児の母子の研究で明らかとなっている。例えば、母親は遊びや食事時間において、子どもがわかりやすい大きな動作や、抑揚をつけた高い声での話しかけなど、明示的な手がかりとなる行動を用いて、子どもの注意をひきつけ、維持している。しかし、母子関係を評価する上で、このような母親の養育スキルだけでなく、実際の育児をとりまく環境の安定と母子の関係性は相互作用の上で形成されていることをふまえる必要がある。つまりその時の夫婦関係や家族関係を含め、その心身の健康や生活水準の維持、自己実現の機会、幸福の追求といった基本的な欲求についても考える必要がある。

次に、発達障害児の場合においては、母親は定型発達児の母親よりもこの明示的な手がかりを多く用いて母子相互交渉を成立させていることが明らかとなっている（Shizawa et al., 2013）。これは、相互交渉成立には母親の積極的介入が重要であることを示唆している。また、発達障害児の母親は、他の疾患と比較して障害がみえにくく、障害受容の面で不安や困難が多いこと（例えば山根, 2010）などから、育児困難感を持ちやすいことが指摘されている。したがって、発達障害児支援において、母子相互交渉で重要な役割を担う母親の支援は大変重要であり、母親の実際のニーズ把握は、効果的な支援上、必要不可欠である。現時点における日

本の発達障害児への支援は、法的整備を含め問題が山積しており、母親など家族を含めた支援体制の早期の整備が望まれている。

早期発達支援制度については、米国では1980年代半ばから整備され、その基本的な理念として「子ども中心」のサービスから「子どもを含めた家族を中心とするサービス」への転換がはかられている。このため、家族アセスメントの重要性が指摘され、その手法についても多くの研究がなされている（例えば、Bailey et al., 1988; Bailey, 1996）。しかし、前述したとおり日本では家族アセスメントにおいて発展途上にあり、子ども中心のアセスメントで留まっていることが多い。また、育児支援の研究でも、近年課題となっている母親の就労問題など経済状況を含め検討できているものが極めて少ない。

## 2. 研究の目的

本プロジェクトでは、発達障害児をもつ母親の実際のやりとりや困りごとについて行動観察と質問紙調査で実態を把握した研究と母親の語りを質的帰納的に分析した研究の2つの視点で実施した。

### 1) 発達障害児とその母親のやりとりについて

食事場面を用いて、発達障害児とその母親のやりとりにおいて、母親の子どもに対する促し行動その効果について探索的に検討することを目的とした。

発達障害児が抱える偏食の程度について捉え、感覚特性の視点からその要因を探索することを目的とした。特に感覚特性の中でも口腔感覚を中心に検討した。

地域在住の幼児の養育者を対象に、幼児期の子供が抱える食行動の問題の実態を把握し、その関連要因を明らかにすることを目的とした。上記で明らかになった食行動の問題について、定型発達児も含めてどのくらいの頻度のものであるか、その要因を明ら

かにするために、食行動の問題の要因として個人要因である自閉症の特性や感覚特性と、環境要因である育児環境について焦点をあて検討した。

2) 発達障害児をもつ母親の育児状況や就労、家族関係といった養育環境を多角的に検討し、かわりの難しい発達障害児に対する母親の養育行動プロセスの影響要因を明らかにする。特に、母親自身の自己実現や幸福感といった心理的側面と、経済面を含む社会的環境要因との関連について検討することを目的とする。

### 3. 研究の方法

1) A 病院入院患児のうち、DSM-TR を用いて自閉症スペクトラムと診断された DQ70 以上の 2 歳～6 歳までの児とその母親 14 組 (男 12 名、女児 2 名) を対象とした。病室における昼食場面をビデオで撮影し、行動指標を用いて分析した。Orrell-Valente et al. (2007) を参考に母親の促し行動 (12 カテゴリー) およびその他のかわり行動 (2 カテゴリー) さらにそれらの促し行動に対する児の応答についてそれぞれ分類し、観察時間あたりの生起率を算出した。

A 病院入院患児のうち、DSM-TR を用いて自閉症スペクトラムと診断された 2 歳～6 歳までの児とその母親 22 組 (男児 20 名、女児 2 名) を対象とした。半構造化面接において、事前に配布した自記式質問紙を基本に子どもの生育歴、家族構成、発育・発達歴、体格指標、食行動評価項目、食品における好き嫌い品目、および感覚特性を把握し、その内容を確認しながら母親の食事意識等を聞き取った。

対象は、A 県 2 市において研究協力の同意が得られた保育所、幼稚園、療育機関に通う 4～6 歳児 1,678 名とその養育者であった。協力機関を通じて養育者に無記名自記式質問紙を配布し、回答は協力機関に設置した回収

箱および郵送で回収した。調査項目は、子供の生育歴、家族構成、養育者による食行動評価、対人応答性尺度 (Social Responsiveness Scale; SRS) 日本語出版準備版 (神尾, 2014)、日本感覚インベントリー (Japanese sensory inventory revised; JSI-R: 太田, 2002)、および育児環境指標 (Index of Child Care Environment; ICCE: 安梅ら, 2004) であった。統計学的解析は、<sup>2</sup>検定、Fisher の正確率検定、重回帰分析を行った。

この研究は、京都大学の医の倫理委員会の承認を得て実施した (E2358)。

2) DSM-5 を用いて自閉症スペクトラムと診断されている子ども (36 か月から 72 か月) とその母親 4 組を対象とした。方法は、まず質問紙調査用紙を用いて基本属性、育児情報 (育児ストレス、母親の就労、世帯収入、保育所や幼稚園、療育教室等の利用状況など) について母親に記入してもらった後、育児の上での困難観等について半構造化面接で聞き取った。面接項目は、「ここ最近の一日の過ごし方について」「子どもとの生活についてどのように思っているのか、これまでの変化などについて」「現在の状況を受け止める中で、自分自身に関して思っていることについて」「これから子どもが保育園や幼稚園などの集団生活に参加していく (した) 上で心配なことについて」を聞き取った。

この研究は、京都府立医科大学倫理委員会の承認を得て実施した (ERB-E-375)。

### 4. 研究成果

1) 上記の研究について、食事中の母親の子どもへの促し行動では、「中立的な促し」が多く、先行研究と同様の傾向であった。また、子どもの応答率も良く、端的な方略として適していると捉えられた。次いで多かったのは、本人の意思を確認しながら促す行動である「意思確認」であった。これは、頻度的に高く用いられていたが応答率は低かった。発達障害児は障害特性上「意思伝達」に困難

さがあることから、促す時に用いるには配慮が必要な方略であると考え。子どもの応答率で最も高かったのは「称賛」であり、定型発達児と同様の効果が示された。しかし、生起率は他の方略より低く、多用されていないことから、今後は、行動の頻度だけでなくやりとりの文脈やタイミングなど、質的な側面を検討することによってやりとりの詳細が明らかになると考える。

2) 上記の研究では、詳細の事例検討による食行動での困難さと口腔内の感覚過敏との関連を検討した。結果として、子どもが嫌いな食品数と口腔の感覚を評価した感覚スコアとの明確な関連性は認められなかった。しかし、実際に偏食があることが多いことや苦手な食べ物に共通性が認められたことから、特定の食物と口腔の感覚過敏が関連している可能性が示唆された。また、口腔内の感覚評価において同程度の困難さを示していたとしても、その背景にある問題は個人により異なっていた。刺激に対する過敏性だけでなく固執性などの障害特性が栄養面での影響を与えること (Lane et al., 2014) から、より多角的な視点で評価し対応していく必要性が示唆された。また、感覚鈍麻は一見、好き嫌いがなく他の問題行動も少なく受けとめられるため、周囲から気づかれにくい。感覚面、口の機能の発達を含め総合的な評価を行い、その子どもの特性に合わせた介助を行うことで、本人の食べる機能の発達を促していく必要があると考える。

3) 上記の調査を踏まえて上記の調査において、自記式質問紙調査が実施された。結果は、843人から回答を得て(回収率50.4%)、有効回答数は583人(有効回答率34.7%)であった。養育者の捉える食行動の問題数は、一人平均  $2.43 \pm 2.26$  個、男女共に約4割に偏食が認められた。食行動の問題数と関連要因についての重回帰分析では子供の食行動の問題数と有意な正の関連を示

した変数は、SRST 得点 total ( $r = 0.188, P < 0.001$ )、JSI-R の味覚 ( $r = 0.319, P < 0.001$ )、聴覚 ( $r = 0.168, P < 0.001$ )、ICCE の人的かわり ( $r = 0.096, P < 0.010$ ) と社会的サポート ( $r = 0.085, P = 0.022$ ) であった。一方、負の関連を示したのは、JSI-R の嗅覚 ( $r = -0.108, P = 0.013$ ) ときょうだい ( $r = -0.091, P = 0.010$ ) および年齢 ( $r = -0.077, P = 0.029$ ) であった。本研究において、「偏食」や「じっと座ってられない」はこの時期に典型的な食行動の問題と考えられた。また、食行動の問題数と、自閉症的傾向や感覚特性との関連が明らかとなり、そのうち直接的な味覚、嗅覚だけでなく、聴覚の関連が認められたことから、味や香りだけでなく、感覚特性全体を捉える評価の必要性が示唆された。さらに、食行動の問題数には、自閉症的傾向、感覚特性などの個人要因だけでなく、人的かわり、社会的サポートなどの育児環境要因についても関連が認められた。食行動の問題に対する指導には、これらの関連要因を総合的に検討することの重要性が示唆された。

2) この研究では、上述してきた研究 ～ を踏まえ、母親が抱える実際の育児上の困難感とこれまでの子どもとのかかわりの中で感じてきた育児観についての語りを得た。

結果として、母親は子どもの障害については「子どもが話せるようになる」や「大事なことが伝わる」「ずっと抱っこしてなくても良くなった」と感じられるまでは子どもとのやりとりに悩みをかかえており、周りの子どもやきょうだいと比べることで違いを感じ、さらに迷うなどの語りが得られた。また、子どもために時間的に拘束されることや困難さは「それが生活」と日常生活になっており、困り感はあるも窮屈さや負担ばかりではないことが明らかとなった。また、幼児期ではまだ将来的な見通しがたっていない母親が多く、子どもが保育園や幼稚園などの集団に入ることは「成長への期待」と「新しい

環境についていけるか不安」と相反する思いがあり、また、「自身の就職などの将来的な期待」とがあることが示された。集団に入れるかどうかは子どもだけでなく、母親の生活スタイルや将来像にも影響することから、子どもだけでなく母親の不安や思いに対する精神的サポートの必要性が確認できた。今後は、対象数を増やし、さらに障害程度や家族の支援体制の有無などについてもさまざまな家庭における調査を行い、養育行動のプロセスと要因について検討していく。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

志澤美保・義村さや香・趙 朔・十一元三・星野明子・桂 敏樹(2017). 幼児期の子供の食行動と養育環境との関連. 京都府立医科大学看護学科紀要, 27, 35-45. 査読あり.

〔学会発表〕(計8件)

志澤美保・義村さや香・趙 朔・十一元三、幼児期の食行動に関連する多要因分析-自閉症的傾向、感覚特性および育児環境の実態-、第58回日本青年医学会総会(奈良市), 2017. 10.5-7.

志澤美保・義村さや香・趙 朔・十一元三・星野明子・桂 敏樹、幼児期の食行動の関連要因の検討-自閉症的傾向、感覚特性および育児環境の実態-、第76回公衆衛生学会総会,(鹿児島市), 2017. 10.31-11.2.

志澤美保・義村さや香・趙 朔・十一元三・臼井香苗・星野明子・桂 敏樹、地域在住幼児を対象とした質問紙調査による食行動と自閉症的傾向および感覚特性との関係, 第27回日本発達心理学会大会, 北海道大学(札幌市), 2016.4.30-5.3.

Shizawa, M., Yoshimura S., Zhao, S., Hoshino, A., Katsura, T., & Toichi, M., Do Autistic Traits Influence Food Preferences? A Large-scale Study with a General Population of Preschool Children in Japan. The 22nd International Association for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions World Congress, Calgary (Canada), 2016.9.18-22.

志澤美保・義村さや香・趙 朔・十一元三、地域の一般母集団を対象とした大規模調査における、自閉症的傾向と食行動の関係第二報, 第57回日本児童青年精神医学総会, 岡山コンベンションセンター(岡山市), 2016.10.27-10.29.

志澤美保・松寄順子・衛藤 萌・辰巳愛香・山本知加・吉崎亜里香・平田郁子・毛利育子・谷池昌子、自閉症スペクトラム児の幼児期における偏食と感覚特性との関連, 第57回日本小児神経学会学術集会, 大阪国際会議場(大阪市), 2015.4.17-19.

志澤美保・南川沙紀・小田川 敦・細川陸也・星野明子・桂 敏樹、幼児期の子どもの食行動に養育環境が与える影響の検討, 第74回日本公衆衛生学会総会, 長崎ブリックホール他(長崎市), 2015.11.4-6.

志澤美保・松寄順子・衛藤 萌・辰巳愛香・山本知加・吉崎亜里香・酒井佐枝子・毛利育子・谷池昌子、自閉症スペクトラム児の食行動特性と食事場面における養育者とのやりとりの検討, 第57回日本発達心理学会, 東京大学(東京都), 2015.3.20-22.

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

志澤 美保 (SHIZAWA, Miho)  
京都府立医科大学・医学部・准教授  
研究者番号: 00432279

(2)研究分担者

桂 俊樹 (KATSURA, Toshiaki)  
京都大学・医学(系)研究科・教授  
研究者番号: 00194796

星野 明子 (HOSHINO, Akiko)  
京都府立医科大学・医学部・教授  
研究者番号: 70282209

(3)連携研究者

なし